

於て一貫せんとするやうである。第一編、經濟、統制に於ては、封建社會が貨幣經濟の合理主義によつて拒否せらるゝを説き、藩札發行、稅制に現はれたる收入の相對的遞減、農民經濟、藩財政の安定確立策としての林業等を論じ此等は多く著者の所謂基礎的分擔研究にして岡山、津山藩の上に試みられてゐる。第二編社會、鬭争には、これを必然的繼起の封建制崩壞過程の一現象と觀、獨特の地方色表現を還元し、その普遍性を求めんことを、作州福山藩、高野山領、羽州、豫州、上州の百姓一揆を調査して時間的並に地理的分布、類別、發生原因等の概念の下に封建制崩壞過程を見んとしてゐる。(菊版五一〇頁、改造社發行、價三・五〇)(小葉田)

● 萬葉集の文化史的研究 西村 眞次著

文化史の發達が土俗誌乃至人類學に負ふ所の大なるは皆人の知る所である。我國に於てこの方面に大なる努力を捧げられた一人として西村眞次氏をあける。本書亦この種の著作であり萬葉集を文化人類學の方法に依つて處理したもの、換言すれば萬葉集によつて古代人衆の生活

様式がいかなる形に窺はれるかを見たものである。先づ萬葉人の人種の基準を述べその中に隼人、肥人、阿陀人の存する事を説き次に工藝方面では衣食住始め、旅行曆術、音樂舞踊の如何を考察し、社會的現象に於ては性的關係より家族及社會の組織を論じ勞働の分配に及び併せてその方法を見た。こゝでは又政治外交の方面をも取扱ひ最後の土俗的現象研究の部門に於ては咒的習俗、禁忌的習俗、正占と雜占、靈感の兆證、祈禱と祭祀、葬儀神話と傳説の諸項について研究を加へて居る。この種の企ては我國史界に於ける新しき試の一に屬し興趣の豊かなるものあるを覺えるが所謂文化史なるものがこの境域に止まるであらうかは疑なきを得ない。その研究は概して記述的並列的であり、諸種の推論には聊か論理的必然性が缺けて居るかに思ふ。私は氏の先驅者的態度に對しては常に敬慕の心を失はないものであるが、なほ透徹したる文化人類學的研究のこれによつて更に興らんことを願ふものである。(菊判四二八頁、東京東京堂書店發行、定價三・二〇)(肥後)